

## 巻 頭 言

副支部長 石井吉之 (北海道大学低温科学研究所)

3回目の役員就任も今年で3年目となり、そろそろ終わりが近づいてきました。支部創立50周年(2009年)を迎える際に、理事の役割分担制、機関誌の電子化と有料化、ホームページやメーリングリストの整備と活性化、社会貢献事業(災害調査、教育)への取り組み等々、大幅に制度を改めた時の事務局を務めていた関係で、その後の動きがどうなっているかが気になっていたのですが、事務局の内側から見渡してみると、どうやらそれらの方策も板についてきたようでひと安心しています。多くの理事の手によって会務が並行して進められるのは喜ばしいのですが、人的資源に限りがあるため、年を経るにつれて新しく理事を引き受けてくれる方を見出すのが難しくなっています。幸い北海道支部は産官学の連携がうまく運んでいるので、産業界からの貢献で何とか凌いでいます。私を含め学界の皆様にもなお一層の貢献をお願いしたいのですが、学会業務は本務と見なされない、職種によっては業績評価の対象にすらならないなど、厳しい情勢の下に置かれているのも事実です。けれども、この手の厳しさは何も今に始まったことではなく、大学の先輩諸氏も昔からその時々に応じた厳しさと闘って来られたはずです。ですから少なくとも私は、この程度のことはよくあることだと考えるようにしています。

支部活動を今流に自己点検評価してみると、自分で言うのも憚られますが、及第点をあげられると思います。他の3支部の主な活動は研究発表会と機関誌発行くらいだそうで、地域講演会、教育普及活動、災害調査活動など、北海道支部のアクティビティーは非常に高いと自負しても良いでしょう。もちろん、本業に追われながらも準備と運営に携わる理事の皆様があってこそこの賜物です。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。その一方、見直さねばならぬ点もあります。ひとつには財務体質の脆弱さが挙げられます。公益法人化以降、財務は本部と一体化されたので、必ずしも支部だけの問題ではありませんが、遠隔地理事の交通費くらいは完全負担できるようにしたいものです。地域講演会にしても一昨年は事業助成金を得てようやく開催に漕ぎつけることができました。本部の事務局移転・一部外部委託化もひと区切りついたので、今後は徐々に改善されていくと期待されます。もうひとつは、北海道支部や雪氷学会だけの問題ではありませんが、会員の高齢化です。私が入会して間もない頃は自分も周りも若い人ばかりで、自分が所属する水関係の学会に比べると若さがみなぎり、羨ましい限りでした。あれから四半世紀たち、あの時の若者は皆それなりの年齢になりましたが、それに続く者がなかなか増えてきません。雪氷学の拠点が縮小しているのも一因かも知れません。北海道支部では「北の風花賞」によって若手研究を奨励していますが、母集団が少ないために毎年選考に苦慮しています。もっともっと若手の発表申込や論文投稿が盛んになるよう、指導される先生方にもよろしくお願ひしたいと思います。そして若手の皆さん、支部での活動を全国大会や国際大会に駒を進めるためのトレーニングセンターとして大いに活用してください。著作権遵守や、執筆要領に従った論文の書き方、文献引用の仕方などもしっかり学習してください。そして、行く行くはできれば雪氷学に関連した職業について雪氷学会の屋台骨や裾野を支えてください。皆さんの頑張りがないと、もう四半世紀後には雪氷学会は無くなっているかもしれません。若手ばかりではありません。ミドル層、ネクスト・シニア層、シニア層が各人各様の役割を認識し行動することによって、雪氷学会を盛り上げていきましょう。